

# 平川 力（ひらかわ・つとむ）

## 1、プロフィール

実業家、政治家。大正9年頃から、短歌、詩を書き始める。終生、福士幸次郎、一戸謙三、石坂洋次郎、高木恭造ら文化人との親交を深めた。

<生没>

1899(明治 32)年 11 月 15 日～1958(昭和 33)年1月 26 日

<代表作>

「弘前新聞」の「北方文藝」欄(大正 10 年頃から担当)。

<青森との関わり>

弘前市出身。短歌、詩を弘前新聞などに発表。青森日報社主を経て、弘前市議会議員に当選。市内で割烹を経営。

## 2、作家解説

弘前市立第一大成小学校から青森県立弘前中学校に進学したが中退する。キリスト教伝道隊員、銀行員などを経て、大正6年頃から短歌を弘前の文藝雑誌「テラコタ」に投稿する。「酔ひしれて／冬を親しみ／帰り来る／この夜の深みを／汽車の音すれ」は、その時の作品である。他に、短歌誌「あすなろ」にも作品を投稿した。平川が文壇に筆を揮うようになったのは、同9年にパストラル詩社同人となった頃からである。同 10 年頃から弘前新聞社で「北方文藝」欄を担当、代官町の自宅を「街上社」と称し、木村ふみ子「和らぎの詩」、小池みや子「赤い星」、「小曲三篇」など女性の筆名で同紙に掲載した。一戸謙三、桜庭芳露、野村鳴淑、工藤静歌ら文学仲間との交友を持った他、福士幸次郎の地方主義の考えに共感し、福士の「地方主義の行動宣言」にも名を連ねた。また、石坂洋次郎を頼って来弘した葛西善蔵の身边にも気を配ったが、その展開については石坂の小説「旧友H君」に詳述されている。

同 15 年に、平川は青森日報社社主となる。平川は同社の主筆に福士を招聘したのだが、同社の記者であった高木恭造は、福士の「徹底的に方言だけで書いてごらん」という助言を得て、方言詩「生活(クラシ)」を誕生させた。同社は東奥日報社との競争に敗れ、平川は青森から撤退した。折しも、昭和4年男子普通選挙が実施され、平川は弘前市会議員に当選する。同8年には、トップ当選で再選された。任期半ばにして県議会議員選挙に臨んだが、同 10 年、14 年とも次点に甘んじた。戦後、同 22 年に弘前市会議員に返り咲きを果たしたが、公職追放となる。この間、代官町に乗合タクシー会社、南川端町に割烹旅館料亭川善、元寺町に料亭満壽川を開業し、実業家として大いに手腕を振るった。

同 19 年には、福士の下北での砂鉄調査に同行した他、一戸謙三、石坂洋次郎、高木恭造らと終生親交を深めた。同 31 年 10 月脳溢血に倒れ、33 年1月 26 日逝去した。

### 3、資料紹介

#### ○弘前新聞「北方文藝」

##### 新聞記事

1922(大正 11)年1月 30 日

大正 10 年頃から、平川は弘前新聞社記者として、「北方文藝」欄を担当。詩、訳詩などの投稿作品を撰し、同欄に掲載した。代官町の自宅を「街上社」と称し、詩、短歌、戯曲、小説などを掲載した文藝誌「街上」の出版を計画した。